

第三五回 光華講座

真宗関係浄瑠璃の発祥

——東西本願寺・「しんらんき」・商業出版——

大谷大学教授

沙加戸 弘

はじめに

本日は、今日まで、伝統芸能として受け継がれている人形浄瑠璃の濫觴の時代、真宗関係の高僧伝、とりわけ親鸞聖人の伝記が、まことに大きな働きをもっていた、そしてまたそれは、決して故なきことではなかったのであるということを、標題に掲げました、東西本願寺の分派、商業出版のはじまり、ということがらを手がかりに、申し述べてみたいと存じます。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

中世日本社会の変動と文化芸術の展開

源平の鬪諍は、この国の社会体制の流れの中においてみれば、最も激しい変化をもたらしたものでありました。今日、御参会の皆様方の中には、ひょっとすると、「源氏と平氏の戦いであった」というくらいに把え方をなされている方がおられるかもしれませんが、実はこの源平の鬪諍は、この国に住む人間が初めて経験した全国規模の戦いでありました。貴族武士階級が真二つに分れて、北は東北から南は九州まで、気障な言い方を致しますならば日本全国を修羅の巷と化した、そのような戦いでありました。現代のように、ボタンを押せば百キロ先までミサイルが飛んでゆく、あるいは引金を引けば一キロ先で人が死ぬ、そのような戦いではありません。せいぜいが日本の弓矢の届く距離、最後は刀で斬り合いをする、組み伏せて首をおとす、相手の顔色もわかる、息づかいもわかる、どうかすれば体温までわかる、そのような戦いが全国で繰り広げられたのであります。当然多くの戦死者が出ます。戦死とあたりさわりのない言葉でよびますが、これが殺人であることは事新しく述べるまでもありません。心ならずも戦いにおいてまきこまれた数々の出来事を、生還の後思い出すことは、拷問に等しいと、承ったことがございます。それと明確に意識はされなかったでありましょうが、ここに「生きる」ということに根ざす不安が大きく広がったことは間違いないことと考えられます。この凄惨な状況からかもし出される底の知れない不安が、鎌倉新仏教を生みました。法然・親鸞・日蓮・一遍・栄西・道元と、日本仏教史

における偉大な先達が、綺羅なること星の如く世に出られましたのは、源平闘諍の後の時代の人間、とりわけて身分低い者が如何に不安の真只中に生きたか、ということの証であります。秀れた人間は何れの世にも生まれてまいりますが、その人が何になるかは時代が決めるものであります。その見方をすれば、鎌倉の時代は、人の生き方が求められた時代、ということになります。う。「仏法は身分を超えられるか」これが鎌倉の仏教界に突きつけられた民の間でありました。

今一つ、源平闘諍は「平家物語」を生みました。先程申しましたように、戦死の内実が殺人であることは言うまでもありません。志半ばにして生を終了せしめられた者の重みは、生き残った者にかかってまいります。「過ぎ逝きし者の声が聞こえるか」、これが「平家物語」の主題であります。「過ぎ逝きし者の声を聞く」ことは、古今東西変わらぬ、残されたものの営為であります。先立った者の希みを遺された者が果す、先だった友人が、卒業したかったであろう、と受けとめれば、写真と共に卒業式に出る、それぞれの局面における、過ぎ逝きし者の声の聞き方、ということになります。

【平家物語】は、「平家の人々は浄土往生したかったであろう」と声を聞きました。平家一門の浄土往生でこの叙事詩はしめくられます。

個々の説話の発祥はともかく、【平家物語】が琵琶の伴奏を伴った語り物という芸能として成立したのは、その節付けから見ても、比叡山延暦寺系統の寺院周辺であった、と推定されます。鎌倉時代の末期、壮大な叙事詩として集大成された頃からは、盲目の琵琶法師の手によって管理され平家琵琶として世に盛行することとなりました。

さて、室町中期、応仁の乱を大きな境目として、この「平家琵琶」の隆盛に翳がさします。その要因としてはいくつかの事象が考えられるのですが、

一つには、語られている内容に対する親近感が薄れたこととあります。時の経過に従って、世代が移り、生活様式が変わり、都が焼けました。語られている出来事、人物、はたまた建物、地域に対する親しみがなくなってまいりました。

二つには、ことばの変化であります。鎌倉にありました政治の中心が都室町に移り、関東のことばが京都及びその周辺の在来のことばとまじり合い、室町語が成立いたします。この室町語が、現在我々が使用いたしております日本語の直接の先祖ですが、ともかくも、鎌倉時代とことばが大きく変わった、そこで『平家物語』を聞いて理解することが難しくなったのであります。

三つめには、文化が大きく変わりました。要因は応仁の乱であります。応仁の乱によって、近衛家の文庫、陽明文庫が焼失いたしました。単なる筆頭撰閲家の文庫ではありません。いわばこの時代、国立国会図書館であります。陽明文庫だけではなく、多くの文庫が焼けました。数多の文献の焼失によって、依って立つべき根拠を失った文化は、否応なく現代化され、新しく作り出されなければなりませんでした。

先程、言葉のことを申し上げましたが、ことばだけではありません。現在我々が日本的なものだ、と認識している、お茶、お花、能狂言、浄瑠璃、衣服、住居に至るまで、いわば現代日本の源流が室町時代にあるのは、決して故なきことではないのであります。仏教もまた現代日本に伝

く息づいている、真宗、禅宗そして法華の教えもこの室町時代の蓮如上人、一休禅師といった先達に直接は端を発するものであります。鎌倉新仏教と言われておりますが、実は室町新仏教なのであります。京都は古い町である、と思われれておりますが、洛中で、応仁の乱以前の建物、千本釈迦堂くらいしかありません。それほど、この応仁の乱が、文化史に与えた影響というのは大きなものであります。つまり、くらしの常識、生活の感覚、そういったものが、平家物語に描かれているものと大きく異なってしまった、ということなのであります。

四つめに、社会生活の速度があがった、ということがあげられます。即ち、「平家物語」のゆるやかさと、生活感覚があわなくなつたのであります。

何れにいたしましても、琵琶を手に、「平家物語」を語って日々の糧を得ていた琵琶法師は、「平家物語」に代わるものの用意を余儀なくされたのであります。「経覚私要鈔」によれば、文明の頃、琵琶法師が「平家物語」に添えて語り始めたものは、「早物語」と呼ばれたことがあつたようであります。「早物語」の「早」の一字は、文明の頃の「平家物語」の享受者が、「平家物語」に対して抱いていた不満を表していると思われれます。してみれば、室町中期応仁の乱を過ぎて、「平家物語」が衰退しはじめたその第一の理由は、社会生活の速度の変化であつた、と推定されます。

それはともかく、文明の頃琵琶法師が、「平家物語」以外に、語るべき新たな素材を求めた、という事実は明らかであります。その琵琶法師のもとに合致した素材の中で、最も重く、かつ要の位置を占めたのが、「浄瑠璃御前の物語」であります。

浄瑠璃の発生と伝播

「浄瑠璃御前の物語」は、口承の形で伝播したためであると思われませんが、まことに多くの異本を持ち、「浄瑠璃」あるいは「十二段草子」など名称も様々であります。

凡そ諸本に共通する内容の大略を申し上げます。所を言えば三河の国、矢矧の宿、この矢矧の宿の遊女の長、矢矧の長者が三河の国司の寵愛を受けます。かたみがほしいと思った矢矧の長者は、峯の薬師、鳳来寺の薬師如来に申し子をし、一人の女子を授かります。この矢矧の長者の一人姫が成長の後、偶々矢矧に宿をとった義経と契を交す、というこれが浄瑠璃御前の物語の大略であります。

もと、この「浄瑠璃御前の物語」が、中世の初期、三河の国矢矧の宿周辺において遊行の女性の手によって紡ぎ出されたものであることは、峯の薬師の靈験譚ならびに矢矧の遊女の出世物語という、その内容に徴して明らかとあります。

この濫觴期の「浄瑠璃御前の物語」が、どのような芸能集団によって語られていたか、は未だ詳でないところが多くありますが、文明七年(一四五七)には、『実隆公記』の紙背文書にその名が見えるところから、そのころ既に都の知識人の間に知られていたことがうかがわれ、「スケールの大きい語り手にそれがゆだねられていたからであろう」と、室木弥太郎先生は推測しております。

この原初的な「浄瑠璃御前の物語」が、新たな語り物を必要とした琵琶法師によってその演目にとり入れられたのである、と推定されます。

ところが、現在に残る中世後半の浄瑠璃物語演奏の記録、あるいは伝説の記録は、漆桶万里「梅花無尽蔵」文明十七年(二四八五)、連歌師宗長「宗長日記」大永七年(二五二七)、同じく宗長「宗長日記」享祿四年(一五三一)、荒木田守武「守武千句」天文九年(一五四〇)と、いづれも座頭による演奏、加えて東海地方における記録でありまして、文明七年(二四七五)「実隆公記」の紙背に記された後、「浄瑠璃姫の物語」は、十五世紀後半から十六世紀前半にかけて、尾張・三河の地方芸能に戻った感があります。

この状況が大きく変化いたしますのは、永祿をこえてからであります。元亀二年(一五七二)七月、上京の町衆が室町の御所で風流を踊ったが、その中に、座頭が浄瑠璃を語る風流があった、と「言継卿記」は記しております。天正五年(一五七七)には、上村日向掾が、浄瑠璃大夫として初めて受領した、と「音曲道智編」にあります。このことは、この時期、京都に再び浄瑠璃という芸能の担い手が大量に流入したことを意味しております。

盲目の琵琶法師が、琵琶にのせて語る尾張・三河の地方芸能「浄瑠璃節」を、京都に運んだのは、恐らく織田信長でありましょう。永祿十一年(一五六八)九月二十六日、織田信長は足利義昭を奉じて入京いたします。この時の軍勢は、「播磨三草丹羽家譜」によれば四万、ルイス・フロイスの報告書によれば六万であります。因みに、桶狭間で信長軍の急襲を受けて壊滅した今川義元の軍勢も、諸書によって大きく二万、二万五千、二万七千と二万人台と、四万、四万五千と

四万人台の二説があります。ルイス・フロイスの報告書は公文書であり、恐らくは実際の見聞でありましょうから、実数から大きく外れているとは思えません。また、家臣丹羽長秀が、主君の軍勢を多く書くことはあっても少く書くことは考えられません。となれば、今川軍の二万と四万、織田軍の四万と六万の差は、非戦闘要員の数と見てよいか、と思われれます。

詳しい考証は省きますが、尾張から京都まで、軍備・食糧その他戦闘物資を運ぼうとすれば、二万の軍勢に一万の運搬要員が必要であります。ところが、この一万の運搬要員の必要物資を運ぶために、また五千必要であります。このようにして、この時代の軍勢は、全部で戦闘要員の二倍の人数になるのです。

物資運搬・従軍僧・賄い方、そしておびただしい商人、その中に、遊女や琵琶法師が混じっていなかった、と考える方が不自然というものであります。ましてこの時代、織田信長は一介の武士として入京したわけではありません。天下の仕置人として入京したのであります。洛中の、信長軍に対する畏怖は、「言継卿記」に具に記されております。その信長軍と共に流入した芸能、「浄瑠璃節」が、天下人織田信長の国から来たものとして、洛中にもてはやされたであろうことは、容易に想像できるところであります。

このことからは、未だ推測の域を出ませんが、「浄瑠璃物語の作者、小野於通は、織田信長の侍女であった」という伝承は、浄瑠璃節という芸能が、京都において織田信長の名と共に語り伝えられるものであった、ということを示しております。

ともあれ、上京を果した浄瑠璃節の一部は、三味線という伴奏楽器を得、晴眼の語り手を得、

さらにあやつりを取り入れて、文禄・慶長の頃、遊行の芸能から小屋の芸能へと変貌をとげ、人形浄瑠璃となったのであります。

遊行の芸能から、小屋の芸能となった芸能に、必然的に求められますものは、演目の多様化であります。遊行の芸でありますれば、極端なことを言えば一曲でことは足りるわけであります。相手変わって主変わらずでありますから、前にあらわれる聴衆、享受者を、毎日変えることも可能であります。次の在所へ移動すればよいのです。しかし、四条河原、五条河原での小屋興行、ということになれば、年中一曲のみ、という形態はむずかしくなります。

このようにして、浄瑠璃興行界が演目の多様化を迫られた時、非常に早い段階でとり入れられましたのが、真宗の御開山、親鸞聖人の伝記でありました。

印刷文化の大衆化

ちょうどこのころ、日本の文化史において特筆すべき出来事がありました。商業出版が始まったのであります。現代風に言うならば、出版の民営化が行われたのであります。

遠く飛鳥・奈良の時代に、大陸から、漢字・仏法・紙・布・建築技法など、まことに優れた文化が渡ってまいりました。凡そ、仏法と漢字は、我々が大陸から受けた御恩の最大のものであるかと私は考えておりますが、それはともかく、印刷技術もまた例外ではございません。天平宝字八年に奈良の諸大寺に納められました百萬塔は、なお数万基が現存しておりますが、中に込めら

れました陀羅尼經は我が国最古の印刷で、世界的に見ましても、その古さは一二を争うものであります。

以来、おびただしい数の印刷物が作られてまいりましたが、十六世紀の末まで、この国では、印刷という文化は、仏教という文化の一部分でありました。現代から見れば、まことに不思議としか扱えようがないのでありますが、遠くヨーロッパの地で、音楽や絵画が基督の徳を表現するために存在したと同じく、この国においては印刷は、仏法の徳を賛じ、仏法を普く届けるためにのみ存在したのであります。思えば十五世紀のなかば、ドイツでグーテンベルクが活版印刷を始めました時、最初にとりくんだのは聖書でありました。ひるがえって我国、印刷技術は仏法領のものである、という認識は、十六世紀末まで巖の如く動かぬものでありました。従って、勅撰和歌集といえども印刷されることなく、源氏物語もまた、写本として伝わってまいりました。

この状況に風穴を開けましたのは、一つには戦国の社会体制の一時的な崩壊、今一つには全国を統べました徳川家康の先見の明、ということになろうか、と思います。

鎌倉幕府は、その質実剛健な生活文化と、禁欲的な生き方を愛でて、禪宗を殊の外大切に致しました。これを受けて、室町幕府もまた、京都の臨濟の寺を厚くもてなしました。南禅寺を筆頭に、京都五山がこれに続きます。南禅寺及び京都五山は、自前の貿易船を仕立てる程の経済力を誇り、それぞれ、あるいは連合で印刷所を設けました。ここから出版されましたものが、現在五山版の名でよばれているものであります。

ところが、戦国に入り、室町幕府も弱体化の一途を辿るようになりますと、南禅寺及び京都五

山にも往時の勢いがなくなつてまいります。幕府からの手当が減少あるいは廃止されますと、それぞれの寺院は生活の手立てを自らさぐらなければなりません。不要不急のものから順に借金のかたにする、あるいは売却する、という事態がおこつてきたのであります。

寺の中の印刷所は、寺の求めに応じて版を作り、印刷をするわけでありまますから、寺の側とすれば、一年中、職人まで含めて丸がかえにすることはありません。外注すればよいのです。このようにして、国立の勅願寺の中にあつた、寺の一部であつた印刷所が、場所は寺の中になら、職人まで含めて、借金の担保にされ、次には外部の民の所有物となる、という状況を生んだのであります。

さて、問題は、勅願寺の中にある、もともと寺の組織の一部であつた印刷所を、借金のかたに取つた、あるいは買い取つたおやじであります。ほうつておくわけにはまいりません。なぜなら投資した金が返つてこないからです。寺からの印刷の注文も、たかが知れています。もともと、借金のかたに出す、あるいは売却する、というのですから、一年中稼働している、というようなことはあり得ないわけです。

一方、ここにとんでもないことをしでかした男がいます。徳川家康です。豊臣秀吉が慶長三年(一五九八)八月、なにわのことも夢のまた夢の辞世と共に六十三年の波乱の人生を閉じ、徳川家康は天下の実権を名実ともに我物といたします。これからの天下を統べてゆくのに、印刷という技術が、まことに大きな働きをであろう、天下の民の心を左右することさえ可能である、という思いが、家康にはあつた筈であります。当然この発想には、豊臣秀吉が朝鮮に兵を送り、

その軍が朝鮮から持ち帰った銅の活字が関与していることは容易に想像できます。後、この活字は、紀州徳川家に渡り、現在は国宝に指定されて印刷会社の博物館に所蔵されております。

家康は印刷という方法を使おうといたしました。ところが、印刷は仏法領のものである、という認識が、常識が、大山の如くそびえ立っております。これに風穴をあけなければなりません。家康は慶長四年(一五九九)五月、京都伏見において四書五経を出版いたします。この時代、我国では金属は乏しいものでありましたので、活字は活字でありましたが、木活字、木の活字でありました。さらに、いくら天下人とは言え、印刷が仏法領のものである、という常識は一人の武家の名で穴があくほど、生やさしいものではありませんでした。家康の知恵でありまして、天皇の名前を借りました。勅版、伏見で開版されましたので、伏見版ともよびますが、一般には「勅版 四書五経」とよびならわしております。仏教関係ではない書物が、はじめてひろく刊行されたのであります。

先程申し上げました、五山印刷所の民営化と、この勅版四書五経の刊行、どちらが先であるか、判然といたしません。が、いずれにしても、印刷所を買い取ったおやじが、「お経以外でも出版できるのだ」と、雷にうたれたような思いにとらわれたことは、まずまちがいのないところでありましょう。

すなわち、印刷所を買い取ったおやじが、その投下した資本の回収を目ざして、印刷所の年間稼働をはじめた、これが出版の民営化のはじまりであります。

もうすこし申し上げますと、関ヶ原の戦いの後、世に浪人があふれます。武士は、武術か、論

語を読むか、どちらかしかできません。戦いのなくなった世で、浪人ができますのは、寺子屋の師匠か代筆か、ぐらいであります。このようにして、都市では文盲率が急速に下がります。多くの人が字を読み、字を書く時代が到来したのであります。

このような時代に、どのような本を、誰に書いてもらって、どのような体裁で、いくらぐらいで売ったら一番売れるか、ということを考えることをもって職業とする人間があらわれました。これが本屋のおやじであっても何らかまわなないわけではありますが、とにかく、どんな本を出そうか、と考えることを以て職業とする、編集者が誕生しました。これが商業出版のはじまりのなみであります。

この時代に、歌舞伎と人形浄瑠璃という新しい芸能が産声をあげ、成長の途にいたのであります。先に申し上げましたように、尾張・三河の地方芸能であった浄瑠璃は、織田信長の軍勢と共に上京、一部は三味線という伴奏楽器を得、晴眼の語り手を得、さらにあやつりを取り入れて、遊行の芸能から、小屋の芸能へと変貌を遂げました。小屋の芸能となった以上、そこに多様な演目が要求されるのは理の当然であります。その要求に応えて、先程申し上げました近世初期、京都において商業出版が開始されたころ、中世の謡曲を物語化する、あるいは既存の物語の脇筋を創作する、といった手法が多用されます。このことと期を同じくして、人形浄瑠璃においても、既にある物語、まずはなんと言っても正統の浄瑠璃姫の物語であった筈であります。既存の物語、あるいは軍記、高僧伝等が、演目としてとり入れられました。

中でも、非常に早い段階で人形浄瑠璃化されたものに親鸞伝があります。親鸞聖人は、言うま

でもなく、真宗の宗祖であります。近世初期の京都においては、東西両本願寺あるいは佛光寺の開山として庶民には耳慣れた名でありました。ふりかえれば、大坂石山の激しい戦いも昔語りではなく、これはまた後程もう一度申し上げますが、その石山にあつた本願寺が、和歌山・貝塚・天満と地を革め、天正十九年京都六条堀川に移り、次いで慶長七年隠居していた教如上人が徳川家康より東六条の地四町四方の寄進を受けて、大谷本願寺すなわち東本願寺を創立した、という一連の動きも目のあたりであつた筈であります。

激しい戦いの余韻と東西分立の緊迫感と、東西両本願寺が整備されてゆく動きの中で、宗祖親鸞聖人に対する関心も高くなつていたことでありましょう。その関心の高さが、「しんらんき」を生み出したのであります。

浄瑠璃「しんらんき」

現存する全古浄瑠璃正本の中で、まず第一にあげられるのが、この寛永古活字版の「しんらんき」と、「浄瑠璃十二段」（仮題）であります。古浄瑠璃正本の中で、古活字版のものは現存この二部のみであります。人形浄瑠璃の草創期、「しんらんき」はまことに大きな演目であつたことが推定されます。

現存古活字版「しんらんき」は、御手許の資料の（一）を御覧ください。現在龍谷大学図書館の所蔵でございます。寛永中期の古活字版、もとは能登の阿岸の本誓寺の蔵本でございます。

た。大型の立派な装丁で、縦二十六・三センチ、横十八・五センチ、上下二巻一冊で、やや厚手の緒紙の袋綴、六段本で半丁十二行、挿絵もなく、所屬太夫の記載もございませんが、あとあとの展開から見て、伊藤出羽掾系統の可能性が高いと考えられます。これは後程もう一度申し上げます。

内容を簡単に紹介いたします。資料の(二)を御覧下さい。

初段は、親鸞聖人の名が天親の親と曇鸞の鸞によるものであるという名の由来から始まり、家系の説明がなされます。皇后宮の大進有範の子であったが、父有範の願いによって九歳の時に出家し、慈鎮和尚の弟子となり、善信房と名乗ることとなります。あるとき、慈鎮和尚が、我恋は松をしぐれのそめかねて まくづが原に かぜさはぐらん、という恋歌を詠み、知識の恋するところがあろうか、と問題になり、勅答に添えて慈鎮和尚が善信房を朝廷に送ります。この時の詠歌によって、叡感を賜った善信房は、帝より御衣を賜り、これをえりまきとなされた、という説話が語られます。

続いて第二段、善信房は六角堂に参籠、行者宿報没女犯 我成玉女身被犯 一生之間能莊嚴 臨終引導生極樂、の四句の偈文、行者宿報偈を感得、そのまま黒谷に赴き法然上人に対面、法然上人にも行者宿報偈の感得があり、善信房は二十九歳で法然上人に入門なされます。其後、九条月輪殿の要請により、玉女姫を娶り坊守とし、真宗を立宗されることとなります。ここに親鸞聖人の勸化があり、大無量寿経の十八願を説いて、仏と神は水波の違いである、と説かれます。

さて第三段、都近き諸宗の碩学は、法然上人親鸞聖人の教えを、魔の法であると奏聞、帝もす

ておきがたく、法然上人は土佐へ、しんらん上人は越後へと流罪になります。法然上人の御弟子、十れん・あんらくは、禁制の念仏を称して死罪となりますが、首を打った二人の太刀取は、血を吐き泡を吹いて倒れます。晒された十れん・あんらくの首は、一人の首には後光がさし、また今一人の口からは生蓮華が生じ、菩薩が影向いたします。

下巻に入りまして四段目、しんらん上人は越後から常陸へと赴きます。山伏のみやうほうほうは、しんらん上人を書し申さんと、仲間を催してまちぶせいたしますが、山で待つと谷を通られる、谷で待つと山を通られる、二手に分かれているとお出ましが無い、とどうしても行き会いません。二十四人の山伏が稲田におしよせて上人をとり囲みますと、虚空より花降り異香薫じて菩薩が影向、上人の御顔は金色に輝き、弥陀の尊容と変じます。二十四人の山伏は上人の御弟子となります。

五段目、しんらん上人の御説法であります鹿島の明神が二十丈ばかりの大蛇となつて、上人の説法を聴聞し、後に三十歳ばかりの大夫となつて礼拝し、井戸と御簾と戸帳を奉施いたします。鹿島の一の神主がしんらん上人の御弟子となります。

六段目、常の佐竹刑部左衛門が熊野へ参詣し、参籠いたします。その参籠の夜半、内陣から金色の光がさして権現の来臨があり、はるか末座におりましたよこそねの平太郎を礼拝して内陣に戻られます。佐竹刑部左衛門は立腹して、毎年参詣している私には何の利生もなく、また先達の山伏のように精進潔斎の人にならばともかく、いやしき人夫に礼拝あるは不思議のことである、と下向しようといたしますが、先達のくりもと房しやうしん法印に留められ、なお参籠を続けた

ところ、ちはやぶる たまのすだれをまきあげて ねぶつのこえを聞くぞうれしき、という権現の詠歌が聞こえ、佐竹刑部左衛門が夢の内に念佛を称したところ、重ねて、いやしきも たかきもなべてたのみつつ なむあみだぶつと いふぞうれしき、という詠歌が示されます。夢さめて後、佐竹刑部左衛門が、よこぞねの平太郎に子細をたずねると、よこぞねの平太郎は、近年しんらん上人の弟子となり、念佛の行者となった、と答えます。そこで、佐竹刑部左衛門をはじめ、くりもと房しやうしん法印も平太郎の弟子となります。佐竹刑部左衛門は上洛、参内して事の次第を奏上、平太郎にしんぶつ上人の宣旨が下ります。その後、都が三日間、暗闇となる事態が起こります。こそで博士に占わせたところ、都におわすべき上人が都にわたらせ給わぬ故であるとの事でありました。急ぎしんらん上人を都にうつし申せという宣旨があり、しんらん上人は鹿島の神主を御供に上洛の途につかれます。相模の国かうずや、箱根権現などで上人はさまざまの奇瑞を示しつつ、都に帰着なされます。内よりの宣旨により、しんらん上人は西洞院押小路東で念仏の教えを広められます。しんぶつ上人は、佐竹刑部左衛門と共にしんらん上人に教えをうけ、常陸の国に帰り、稲田に寺を建てて念佛の教えを広めます。しんらん上人は、都で九十歳で往生を遂げ、女しん上人が跡を継がれました。今に至るまで、大谷ほん願寺と申して、代々善智識の御繁昌、日本第一の宗旨であります。

以上が、寛永古活字版「しんらんき」の内容大略であります。

さて次に、この寛永古活字版「しんらんき」がどのようなところで、どのように成立したか、という点について、考えてみたいと存じます。

『しんらんき』成立の背景

ひるがえって、親鸞聖人の書承の伝記は、永仁三年(一二九五)十月、親鸞聖人の曾孫覚如上人によって著されました。『善信聖人絵』を以て嚆矢といたします。後に幾度かの改訂を経て、康永二年(一三四三)十一月、『本願寺聖人 親鸞 伝絵』の成立を見ます。この後、特別の事情のない限り、『伝絵』という略称で康永本を指すことといたします。覚如上人は「伝絵」を著すにあたり、始終一貫、資料の(三)を御覧下さい、『伝絵』上本、四段目でございますが、「建長八歳 丙辰 二月九日の日の夜 寅時 釈蓮位夢想の告に云く、聖徳太子、親鸞聖人を礼してまつりましてのたまわく、敬礼大慈阿弥陀仏 為妙教流通来生者 五濁惡時惡世界中 決定即得無上覺也と。しかれば祖師聖人 弥陀如来の化現にいたしますという事明らかなり」という見方を保ち続けられます。しかしながら、親鸞聖人の行実を記すに際しては、焼栗出生あるいは逆竹等の伝説を一切排除なされました。加えて、奇瑞・靈異の類はすべて夢の中におしこめる、という言葉は近代の森鷗外の「山椒大夫」を髣髴とさせるが如き、否、森鷗外をも超えるような方法を執られたのであります。この考え方がどのようにして生まれ、『伝絵』に結実したか、は今はさておき、ともかくも、現実にはあり得ない奇瑞、合理的な説明のできない事態は『伝絵』の中に語られていない、ということになります。この「しんらんき」が、さらされた首の口から蓮華を生じさせ、鹿島明神を二十丈の大蛇と変じさせて聖人の説法を聴聞させていることを

思い合せれば、まずこの点において、「しんらんき」が直接「伝絵」、あるいは「伝絵」から文章のみを別行させた「御伝鈔」によっている、という見方は否定されなければなりません。

親鸞聖人の家系の紹介におきましても、「伝絵」は、資料の(四)を「らん下さい」、「それ聖人の俗性は藤原氏 天児屋根尊二十一世の苗裔 大職冠 鎌子内大臣の玄孫 近衛大将右大臣 贈左大臣 従一位内膳公 号後長岡大臣 或号閑院大臣 贈正一位太政大臣房前公孫 大納言式部卿真楠息 六代の後胤 弼宰相有国卿五代孫 皇太后宮大進有範の子なり」とあります。一方「しんらんき」は、資料の(五)「あまのこやねの御びやうへい 大しよくはんより 廿一代にあつて」と、微妙な違いを見せております。この「くはうたいぐうの大しんありのり」という書き方は、よみくせを写しておりまして、耳で聞いたか、という疑いを抱かせます。いずれにしても、ここに書承の関係はないと判断してよいか、と思われれます。

次にこの「しんらんき」には、親鸞聖人の発心がございません。「しんらんき」は、資料の(六)を御覧下さい、「くはうひひくぐうの大しんありのり」とて、くぎやう一人をはします、然るにありのり、御子一人もち給ふ、御年九さいと申はるのころ、ありのり御心に思し召やう、それつらつら事の心をあむするに、ひくはらくやうの風の前には、しやうじのさかいをのがれん、しかればとんじんちの三どくにまよひ、ほむなふのきすづなにむすほをれ、いかにとして、かのきしにいたらざらむ、爰をもつてあんするに、われ一人の子を持たり、かれをちちんくはんしやうの、御弟子にまひらせ、これをほだいのたねとして、後世ねかはんと思しめされ、らうだうをさしそへ給ひ、ゑいさんへと送らる、」と語ります。即ち、「しんらんき」の主人公は、父の意志

によって出家せしめられたのであります。一方「伝絵」は、親鸞聖人は有範の子である、とは記しますが、有範の許で成長したとも記されず、まして父有範の意志によって出家せしめられたとも記しません。出家は親鸞聖人の意志によるものである、とあります。資料の(四)の後半を御覽下さい、「しかあれば 朝廷に仕て霜雪をも戴き 射山に趨て 栄華をも発くへかりし人なれとも 興法の因うちに萌し利生の縁ほかに催しによりて 九歳の春の比阿伯従三位範綱卿 于時従四位上前若狭守後白河上皇近臣聖人養父 前大僧正 慈円 慈鎮和尚是也法性寺殿御息月輪殿長兄 の貴坊へ相具したてまつりて鬢髪を剃除したまひき 範冥少納言公と号す」とあります。この、「興法の因うちに萌し 利生の縁ほかに催し」が、「伝絵」における親鸞聖人の出家の理由の全てであり、青蓮院において剃髪の折、範冥と名乗った、というのが本願寺門徒の宗祖伝であります。「しんらんき」には親鸞聖人の自発的な求道が語られず、範冥という名もない、という点から考うるに、この「しんらんき」が、本願寺門徒の手になるか、もしくはそれに極めて近い場所で生まれた、という見方も、否定せざるを得ません。

次に、「しんらんき」は、いくつか門徒の常識を違えております。一つには、聖人の字を「上人」と記していることであります。親鸞聖人の「しょう」の字に、この「聖」の字を使うことは、越後流罪の後、自ら「非僧非俗」と称し、有縁の人々の施物のみによって露命をつなぎ、乞食生活をした宗祖を、門徒が自らの誇りと宗祖に対する敬意をこめて、「聖」と呼んだことにより来いたします。真宗門流の中で聖人の字を上人と記すことは極めて少ないと言ってよいであります。今一つには、親鸞聖人入室の時の法然上人の庵室を「吉水」とせず、「黒谷」として

ることです。『伝絵』には、資料の(七)を御覧下さい、「建仁第三の暦春のころ 聖人、二十九歳 隠遁のこ、ろさしにひかれて 源空聖人の吉水の禪房に尋参たまひき」とあります。これを耳にしている吉水を誤ることは考えにくいこととあります。さらには、「しんらんき」四段目、山伏済度における山伏の名、「みやうほうほう」は、親鸞聖人の御弟子となり念仏の教えをいただいてからの名である、と、『伝絵』にございます。

さて、最後にどうしても触れておきたい事柄がございます。それは、「しんらんき」の結びの部分の問題であります。「しんらんき」は、最後に、資料の(八)を御覧下さい、「いまにいたるまで、大たにほんくはんじとは申也、すなはち御世つき、女しんしやう人と申たてまつる、それより代く、ぜんちしきのごはんしやう あつはれ日本第一のしうしこれなりと、みなしゆすをきらぬはなかりけり」と語り、本願寺の繁栄を祝って一曲は終わります。「女しん」、恐らくは「如し」という字に信ずる、という字でありましょう、覚如上人が定められました本願寺三代持の二代目であります。ここで、注目すべきは、「大たにほんくはんじ」の名称であります。先程、いささかふれましたように、本願寺は大坂石山にありました時、軍資金の拠出や寺地移転をめぐって、織田信長と対立、元亀元年(一五七〇)から十年間、激しい戦いをくりかえしました。天正八年閏三月、和睦が成立し、時の宗主覚如上人は、宗祖親鸞聖人の御真影と共に大坂本願寺を退去し、紀州鷲森に移られました。しかし、覚如上人の御長男教如上人は鷲森へ同行せず、大坂本願寺に留まって、父覚如上人から義絶なされながらも、籠城を主張なされました。籠城は、四ヶ月にも及びましたが、遂に八月二日、教如上人は大坂本願寺を退去し、父覚如上人か

ら義絶を解かれるまで二年間、美濃の郡上八幡を中心とする一帯に流浪の生活を送られることとなります。この流浪中、教如上人は、義絶・流浪中にもかかわらず、門主の行うべき職務である絵像の下付をなされています。天正九年(一五八二)九月に、愛知県一宮市の長誓寺に下付された証如上人の御影の裏書には、はっきりと「大谷本願寺釈教如」と署名がごございます。この時期から、教如上人は、「大谷本願寺」の名称を使用し、大谷の嫡流である、という主張をなされていたこととなります。

天正十年(一五八二)六月、織田信長は家臣明智光秀に攻められ、本能寺で自害いたします。信長の後継の地位を固めた秀吉が、本願寺に好意的であったため、顕如上人・教如上人は和解決し、手を携えて本願寺の再建にとりくまれることとなります。

本願寺は、紀州鷲森から和泉貝塚へ移り、さらに天満へと移ります。そして天正十八年(一五九〇)秀吉の命により、京都堀川へと移転いたします。

二年の後、天正二十年十一月、顕如上人が示寂され、教如上人がその職を継がれました。が、次の年、委しい経緯は省略いたしますが、主として教如上人の母上如春尼のはからいで教如上人は辞職隠退となり、弟の准如上人が本願寺を継がれました。

文禄二年(一五九三)閏九月、教如上人は隠退なされますが、その後も、門主の行う末寺への絵像等の下付を行っておられます。そしてそれには、「大谷本願寺釈教如」という署名のあるものが多くあります。これは、隠退なされても、教如上人こそが御門主であると考える末寺・門徒が多くいた、ということを示しております。

さらに、文禄五年この年は十月に改元されて慶長元年となりますが、一五九六年、教如上人は摂津渡辺で梵鐘つりがねを鑄造なされます。この鐘は現在東本願寺の難波別院に伝来いたしますがこの銘に、資料の(九)を御覧下さい、「大谷本願寺 文禄五 丙申曆 林鐘りんしょう下旬第四日云々」とございます。つまり、文禄五年六月に、摂津渡辺に教如上人の住持なされる寺があった、ということになります。

一月に如春尼、八月に豊臣秀吉と相次いで世を去った慶長三年(一五九八)、摂津渡辺の大谷本願寺は難波へとその礎を移します。

次の年、慶長四年、ここに先程商業出版のところで申し上げました、勅版の四書五経の刊行がはあります。教如上人もまたこの年に正真偈・和讃を開版しておられます。

さらに次の年、慶長五年六月、教如上人は大津御坊を造営し、その遷仏法要を行っておられます。この年の九月、関ヶ原の合戦があり、徳川家康が名実ともに天下人となるのでありますが、この関ヶ原の合戦の前後、教如上人は幾度か、家康と出会うておられます。ここで家康の出した結論は、「本願寺はもう既に二つに分かれている。これを追認しよう」というものでありました。

慶長七年(一六〇二)二月、徳川家康は教如上人に、京都東六条の地四町四方を寄せ、ここに大谷の本願寺が新たに創立されることとなり、具体的な東西分派となったのであります。

この新たに創られた本願寺は、京都で大谷本願寺、後には東本願寺と呼びならわされるようになります。従って、近世初期、京都の庶民にとっては、堀川の本願寺よりも、大谷本願寺の方

が耳目に新鮮な、最新流行のものであった筈であります。

このように、本願寺系統の親鸞伝に直接よりどころをもっていないにもかかわらず、大谷本願寺の繁昌で結ばれたこの一曲を勘案いたしますと、真宗門流からはやや遠い、人形浄瑠璃興行という世界において、その当時の観客・享受者の嗜好ということを最大限にとり入れ、観客の入りということを最大の目的として、巷間流布しておりました親鸞聖人の伝記「親鸞聖人御因縁」や「親鸞聖人御因縁秘伝鈔」、あるいは「親鸞聖人御由来」などの資料をよりどころとして成立した、と考えるのが、最も妥当なところでありましょう。

この寛永古活字版「しんらんき」には、先に申し上げましたように、所属大夫の記載がございません。しかしながら、推定する手がかりががいささかならございます。

すこし後のこととなりますが、寛文十二年(一六七三)の秋、京都の書肆鶴屋喜右衛門と八文字屋八左衛門が、親鸞聖人に関わる書籍を刊行いたしました。鶴屋が刊行致しましたのは、「親鸞聖人御伝記」という仮名草子、「浄土さんたん記并おはら問答」という浄瑠璃本、「しんらんき」という浄瑠璃本で、八文字屋が刊行いたしましたのは、「よこそねの平太郎」という浄瑠璃本でありました。東本願寺はもともと、親鸞聖人を人形浄瑠璃で上演するのを嫌いまして、後程申し上げますが、上演の度毎に異議を申し立てていたのでありますが、この時は少し事情が違いました。と申しますのは、鶴屋が、「親鸞聖人御伝記」という仮名草子を刊行したからであります。「親鸞聖人御伝記」は、文章が「御伝鈔」そのままであります。加えて、墨の単色ではありますが御絵伝の絵がそのまま入っております。加えてこの本は、漢字ひらがな本であります。一

般末寺が持っております御伝鈔は、普通漢字片仮名であります。また御伝鈔は、拝読の作法とよみくせを、本願寺で教えていただかなければなりません。現今はかならずさんになっている面もないではありませんが、法令上は今もそうであります。習わなければ読めないものを、ひらがなに直した、あまつさえ今年の報恩講は目前であります。全国から報恩講に集まる末寺の僧侶達にこの本を売りさばこう、という蠶屋の思惑と、これが全国に流れたら、習いにくる僧侶が激減する、と危機感を抱いた東本願寺の思いが激突したのであります。東本願寺は、最初は示談ですませようといたしましたが、蠶屋と八文字屋が応じないため、やむを得ず京都町奉行に訴えました。これが寛文十二年十月二十六日であります。この時の経過は、東本願寺の記録であります【粟津家文書】あるいは【粟津日記】に記されておりますが、東本願寺はこの訴えに正当と説得力を持たせるために、過去にあった事件の証文等の写しを添えております。このことにより幸いにも、寛文十二年以前に東本願寺から訴えて、親鸞伝浄瑠璃の上演を停止せしめた事例が判明いたします。この記録は、浄瑠璃史説明に大きな手がかりを与えたのでありますが、この記録によれば、正保五年（一六四八）正月、大坂において伊藤出羽掾が「しんらんき」を上演し、東本願寺からの申し立てによって中止し、以後、「しんらんき」は上演しない旨の一札を大坂奉行に差し出しております。このことによりまして、恐らく現存の「しんらんき」は、伊藤出羽掾系統のものであろうと推定できます。更にはいふんと後のこととなりますが、寛延二年（一七四九）大坂豊竹座で親鸞聖人の伝記浄瑠璃「華和讚新羅源氏」が上演されますが、この正本の表紙見返しに、掛軸の形式になった「舟岡山御難の段　こそでのみゑい」の場の絵があります。この

掛軸の右の驚燕に「出羽掾昔操」とあります。百年の後にも、「しんらんき」の大本は伊藤出羽掾にある、という認識があった証でありましょう。

また、正保五年の伊藤出羽掾の上演の時のものと思われる正本が、鶴屋喜右衛門から刊行されていることも、「粟津家文書」で確認できます。また、「粟津家文書」には、明暦元年(一六五五)に江戸で「しんらんき」が上演されたことも記録されております。

寛文三年正月、正本屋山本九兵衛ひより、この「しんらんき」が、古活字版でなく整版風本で刊行されます。この時、当然上演があったと考えられますが、この時の記録は残っておりません。寛文三年でありますれば、東本願寺が対応しなかった筈はありませんから、「粟津家文書」に記載があつてしかるべきであると思われませんが、該当する記事はありません。東京大学図書館に所蔵される現存本には、入木のあとが確認できますので、刊行、あるいは上演は決して一度ではなかったと推定されます。

寛文中期、「御かいさんしんらん記」という、表題だけ変更した本が江戸で刊行されました。また同じ頃、「親鸞聖人記」という内題をつけて、仮名草子の形式になおした本も江戸で刊行されております。この本にも、後の印刷である本が確認できますので、幾度かにわたって刊行がくりかえされたと考えられます。

今申上げました多くの本・正保五年鶴屋喜右衛門が刊行いたしました「しんらんき」のみ、伝存いたしませんので内容が確認できませんが、この一本を除いて、ほかはすべて同じ文章、同じ内容でございます。寛永期から、寛文初期「浄土さんたん記并おはら問答」が井上播磨掾によ

つて上演されるまでの三十年間、人形浄瑠璃興行界は、真宗関係浄瑠璃としては、この伊藤出羽掾系の「しんらんき」一本のみを、上演・刊行し続けた、ということになります。

おわりに

思えば、「平家物語」も真宗も、源平闘争を縁として生まれました。室町期、「平家物語」は浄瑠璃姫の物語として再生、真宗も蓮如上人という大きな縁を得て戦国を生きぬきました。

近世初期、浄瑠璃節は上京を果し、人形浄瑠璃として新たな歩みをはじめます。そこに商業出版の開始という縁が重まりました。

一方、十年の石山の軍を縁として、細胞が分裂して新たな活力を得る如く、真宗は東西に分派し、大谷本願寺という大きな拠点を作ることになります。

この気運の中に、「しんらんき」という親鸞聖人の伝記浄瑠璃が三十年の生命を保ったということは、浄瑠璃に限らず出版という分野までも含めて、如何にもはやされたか、如何に魅力に富むものであったか、を証するものであろう、と考えるものであります。

ご静聴、有難うございました。